

文部科学省
「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業
(学びの機会充実ネットワーク)」
令和7年度 成果報告書

鹿児島県教育委員会

1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

【課題と背景】

本県は、離島や中山間地域を中心に小規模校が多く、こうした高校では教員数が少ないという背景がある。そのため、課題として、大学進学等の進路希望に対応した教科・科目の開設が困難な状況がある。

【目的】

本事業の目的は2点ある。1点目は、子供たちの学習の幅を広げ、学習意欲のある生徒が地元で学びを継続できるようにすることである。2点目は、円滑な運営体制を確立し、生徒の社会の変化を乗り越え、未来の社会の創り手となる資質・能力を育成することである。

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項

1.2.1 明らかにする事項

本事業では、以下の4点を明らかにしたい。

- (1) 中心拠点及び域内ネットワークの構築について
- (2) 中心拠点及び域内ネットワークの円滑な運営について
- (3) 教科・科目充実型の遠隔授業における効果的な指導と評価の在り方
- (4) 通信教育における生徒の主体的な学習を促す支援の在り方

1.2.2 課題

- (1) 人員配置に関する予算及び対面授業のための費用の確保
- (2) 人間関係の構築方法の確立や配信できない場合の対応方法
- (3) 職員研修の継続的な実施
- (4) 学習習慣や学習環境に応じた個別支援の更なる工夫

1.2.3 運営指導委員会

- (1) 生成AIの普及を前提に、学習者が自分で解決手段を選び、学習過程を評価する設計への転換
- (2) 遠隔の必要性・ねらいを明確化し、離島・小規模校でも履修機会を保障し、学びのハンデを解消
- (3) 高い配信スキルの継承（新任支援）を進め、巡回型の継続方策や人・予算の確保、成果共有を図る

1.3. ロードマップ

【2年目（令和7年度）】

- (1) 中心拠点及び域内ネットワークの円滑な運営について
 - ・遠隔授業配信センターと受信校間の日々の連絡を円滑に行う工夫を行う。
 - ・構成校に標準となる時程や教科書について提示し、検討を依頼する。
- (2) 教科・科目充実型の遠隔授業における効果的な指導と評価の在り方
 - ・遠隔授業において、生徒が協働的な学び、個別最適な学びを実現するための工夫を行う。
 - ・評価をスムーズに行うための体制づくりを行う。
- (3) 通信教育における生徒の主体的な学習を促す支援の在り方
 - ・情報に加えて、数学、外国語（英語）の通信教育に適した学習デザインの構築を行う。

【3年目（令和8年度）以降】

- (1) 中心拠点と域内ネットワークの安定した運営とその向上に努める。
- (2) 単位認定が可能な遠隔授業が実施可能な教員の育成を図る。
- (3) フォーラムを継続し、県内外の教員と遠隔授業及び通信教育について研修を深める。

1.4 成果目標（アウトカム）と活動指標（アウトプット）の詳細

成果目標・活動指標①（生徒の学習成果に関する目標）

●目標項目：自らの進路希望をかなえる学力の向上（成果目標）

	5年度（実績）	6年度	7年度	8年度
目標値		5年度比5%増	5年度比15%増	5年度比20%増
実績値	25人	37人	78人	
目標設定の考え方	遠隔授業対象校は小規模校であり、教育課程に組み込まれている選択科目が限定されていることから、大学入学共通テストを利用しない入試方法を選択している状況がある。			
成果把握のための測定方法	受信校における大学入学共通テスト受験者数の把握			
目標達成に向けた活動内容及びその指標	大学入学共通テストの受験を想定した教育課程を編成し、遠隔授業や通信教育で当該科目を学ぶことができるようにする。大学入学共通テストの受験者数をその指標とする。			

成果目標・活動指標②

●目標項目：遠隔授業・通信教育を活用した充実した学習活動（活動指標）

	5年度（実績）	6年度	7年度	8年度
目標値			90%	90%
実績値		47人 (92.2%)	8,563人 (97.5%)	
目標設定の考え方	遠隔授業及び通信教育において、自らの学習が充実していたと答えた生徒の数と割合（期間別、教科別延べ数）			
成果把握のための測定方法	学期等で、各教科（科目）の自らの学習を振り返るアンケート			
目標達成に向けた活動内容及びその指標	「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業デザインを取り入れる。学期等で取るアンケートで、各教科（科目）の自らの学びが充実していたと答えた生徒の延べ数及び割合をその指標とする。			

※ 6年度は、トライアル配信（約1か月間）後のアンケート結果

成果目標・活動指標③

●目標項目：「かごしま Online-Campus」で学ぶ生徒の学習目標の達成度（成果目標）

	5年度	6年度（実績）	7年度	8年度
目標値			90%	90%
実績値		96.3%	96.6%	
目標設定の考え方	PDCAサイクルを用いて、「かごしま Online-Campus」を実践することにより、受信校で本取組を活用して学ぶ生徒の高い満足度を得る。			
成果把握のための測定方法	遠隔授業・通信教育を受けた生徒の学習目標を達成できた割合			
目標達成に向けた活動内容及びその指標	アンケートによる遠隔授業、通信教育を受けた生徒の達成度をその指標とする。ただし、遠隔授業に関して、学習目標の達成は単元の観点別評価「思考・判断・表現」の評価がB以上の生徒に限る。			

1.5 2年間の総括概要

1.5.1 職員研修

配信者のスキル向上を目的に、外部有識者を招いた職員研修を7回実施した。加えて、週1回30分程度、授業で効果的であった実践や挑戦した取組を具体的に共有する研修「ミセルバ30」を配信センター内で行った。

1.5.2 効果的な指導の在り方に係る取組

成果目標を達成するため、遠隔授業に関することを、4つの項目に整理し、配信者用のルーブリックを作成した。授業の質の向上については「20分黙る」をキーワードに実施した。具体的には、50分授業で20分生徒が主体的に学習に取り組む時間を設定して、生徒の学習の向上を図った。

1.5.3 巡回型協力員

受信側体制の検証方法として、巡回型協力員の配置を行った。巡回型協力員を配置するための条件を整理し、その条件が揃う場合に巡回型協力員を配置できるものとした。配信科目数の多い古仁屋高校で巡回型の検証を行い、特に支障なく遠隔授業の配受信を行うことができた。特に教職員数の少ない小規模校においては、巡回型の協力員配置は有効であると考えられる。

1.5.4 遠隔授業推進フォーラム

遠隔授業の充実と教職員・参加者の資質向上をねらいに、公開授業・事例発表・協議・講演を実施した。ゲームアプリやスプレッドシート活用等の実践を共有し、協力員の関与基準、表情把握の難しさ、機材・回線整備、学習意欲への働きかけなど課題を明確化。遠隔でも楽しく学べる実感や配信・受信双方の学びが得られ、継続的共有と制度面の柔軟化への期待が示された。

2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

年月	実施内容
R 7年 4月	鹿児島県遠隔授業配信センター開所式実施 単位認定が可能な遠隔授業配信開始 令和8年度の単位認定が可能な遠隔授業の募集
5月	夏課外授業の配信教科（科目）の調査，校長会の実施 対面授業
6月	令和8年度の単位認定が可能な遠隔授業仮決定通知
7月	夏課外授業の配信 運営指導委員会の実施
8月	夏課外授業の配信 PTの会議実施
10月	対面授業 冬課外の配信教科（科目）の調査
11月	対面授業 冬課外授業に係る連絡調整
12月	対面授業 冬課外授業の配信
R 8年 1月	運営指導委員会の実施
3月	令和8年度配信決定通知 受信校との打合せ実施

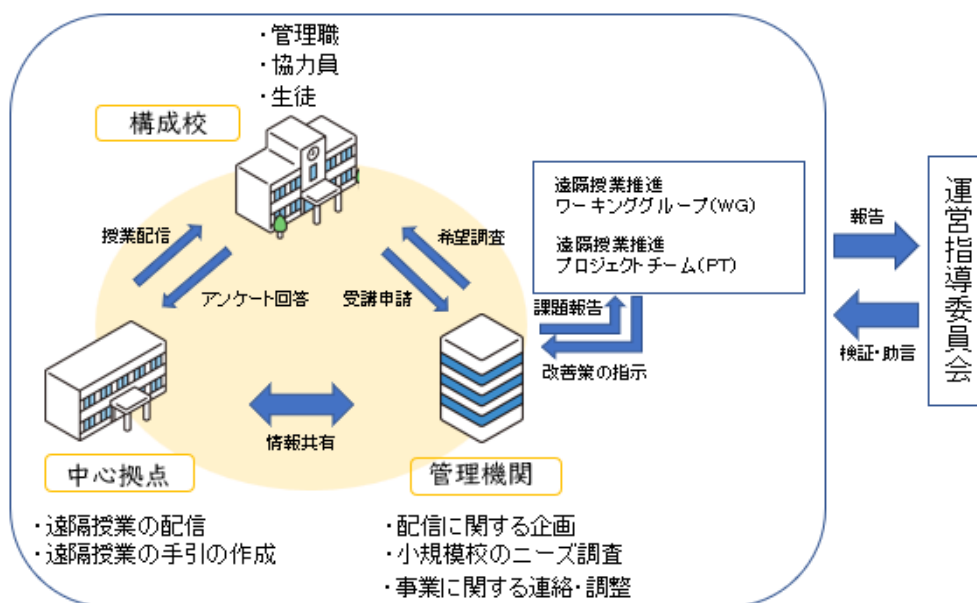
2.2. 実施体制

【遠隔授業に取り組む体制の概要】本県では、令和7年度は、以下の体制とする。

機 関	名 称	役 割
管理機関	教育庁高校教育課	遠隔授業全般に係る企画（募集等含む），予算と決算等
中心拠点	遠隔授業配信センター	授業の配信，時間割作成，手引の作成，配信環境の整備
構成校	離島の小規模高校	生徒のニーズ調査，受信環境の整備

【円滑な調整に資する業務運営方法】以下の会議等を実施し，業務を円滑に運営できるよう計画した。

会議名等	主な関係機関	役 割
日々の連絡	中心拠点，構成校	日々の配信の円滑な実施のための連絡
校長会	管理機関，構成校	募集や実施に関する連絡・調整など
遠隔授業打合せ	管理機関，中心拠点	授業の配信に係る連絡・調整など
運営指導委員会	管理機関，中心拠点	業務運営のPDCA サイクルのチェック
PT 及び WG	管理機関と関連組織	関係する課や各組織間の合意形成，業務の遂行



2.3. 取組概要

【令和7年度に実施した主な取組内容】】

年月	実施内容
R 7年 4月	鹿児島県遠隔授業配信センター開所式実施 単位認定が可能な遠隔授業配信開始 令和8年度の単位認定が可能な遠隔授業の募集
5月	夏課外授業の配信教科（科目）の調査，校長会の実施 対面授業
6月	職員研修の実施（1回目） 令和8年度の単位認定が可能な遠隔授業仮決定通知
7月	職員研修の実施（2回目） 職員研修の実施（3回目） 夏課外授業の配信 運営指導委員会の実施
8月	夏課外授業の配信 公開授業を実施 PTの会議実施
9月	職員研修の実施（4回目） WGの会議実施

10月	職員研修の実施（5回目） 対面授業 冬課外の配信教科（科目）の調査
11月	職員研修の実施（6回目） 対面授業 冬課外授業に係る連絡調整 遠隔授業推進フォーラム実施 令和8年度時間割調査
12月	対面授業 冬課外授業の配信 WGの会議実施
R8年1月	職員研修の実施（7回目） 運営指導委員会の実施 令和8年度時間割調整
3月	受信校との打合せ実施

2.3.1. 遠隔授業実施表

【令和7年度】（3月3日現在）

中心拠点	受信校	教科名	科目	教育課程 （※1）	開設 学年	遠隔授業実施 理由 （※2）	受信側の配置 体制（※3）	遠隔授業 実施回数/ 全授業回 数 （※4）
県総合教育 センター （鹿児島県 遠隔授業配 信センタ ー）	大島北高校	理科	物理基礎		2	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）（※5）	50 / 62
		理科	物理		3	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	92 / 107
		理科	物理基礎	夏季 課外授業	2	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	6
		理科	物理	夏季 課外授業	5	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	4
	古仁屋高校	数学	数学Ⅱ		2	教科科目充実型	巡回型	69 / 91
		数学	数学B		2	教科科目充実型	巡回型	46 / 60
		理科	物理基礎		2	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	45 / 60
		外国語	英語コ ミュニケー ションⅡ		2	教科科目充実型	巡回型	98 / 121
		外国語	論理・表 現Ⅱ		2	教科科目充実型	巡回型	46 / 62
		数学	---	夏季 課外授業	2	教科科目充実型	協力員（数学 教諭）	14
		理科	物理基礎	夏季 課外授業	2	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	6
		外国語	英語	夏季 課外授業	2	教科科目充実型	協力員（英語 教諭）	15
		情報	---	夏季 課外授業	3	専門教員による 指導	協力員（情報 教諭）	12
		外国語	英語	冬季 課外授業	2	教科科目充実型	協力員（英語 教諭）	2

		数学	---	冬季 課外授業	2	教科科目充実型	協力員（数学 教諭）	2
喜界高校	公民	政治・経 済			3	専門教員による 指導	協力員（地歴 教諭）	40/57
	理科	地学基礎			2	専門教員による 指導	協力員（理科 教諭）	45/56
	情報	情報Ⅰ			1	専門教員による 指導	協力員（情報 教諭）	54/62
	情報	情報Ⅱ			3	専門教員による 指導	協力員（情報 教諭）	47/58
	公民	政治・経 済	夏季 課外授業		3	専門教員による 指導	協力員（地歴 教諭）	9
沖永良部高 校	数学	数学Ⅰ			1	教科科目充実型	協力員（数学 教諭）	68/88
	数学	数学A			2	教科科目充実型	協力員（数学 教諭）	41/60
	情報	情報Ⅰ			2	専門教員による 指導	協力員（情報 教諭）	99/119
与論高校	公民	政治・経 済			3	専門教員による 指導	協力員（地歴 教諭）	64/78
	公民	政治・経 済	夏季 課外授業		3	専門教員による 指導	協力員（地歴 教諭）	9
	情報	---	夏季 課外授業		3	専門教員による 指導	協力員（情報 教諭）	2
	公民	政治・経 済	冬季 課外授業		3	専門教員による指 導	協力員（地歴 教諭）	2

2.4. 取組内容

	年月	行事名等	内容
1	R7年 4月	開所式	鹿児島県遠隔授業配信センターの開所式を実施
2	5月	学校訪問	古仁屋高校を訪問
3	5月	学校訪問	沖永良部高校を訪問
4	5月	学校訪問	大島北高校を訪問
5	5月	学校訪問	喜界高校を訪問
6	5月	学校訪問	与論高校を訪問
7	7月	職員研修	第1回職員研修を実施
8	7月	職員研修	第2回職員研修を実施
9	7月	職員研修	第3回職員研修を実施
10	7月	第1回運営指導委員会	令和7年度の事業計画に対する指導助言
11	8月	公開授業	夏トライ！グレードアップ・ゼミ（高校教育課主催）
12	8月	カタリバ合同 MTG	垣根事業各県の遠隔授業配信担当で課題や成果を共有
13	8月	第7回 PT	R7 組織体制、R8 仮決定状況、R9 配信科目の検討について確認
14	9月	職員研修	第4回職員研修を実施
15	9月	先進県視察	島根県視察
16	10月	学校訪問	喜界高校を訪問
17	10月	学校訪問	大島北高校を訪問
18	10月	学校訪問	古仁屋高校を訪問
19	10月	先進県視察	新潟県視察
20	10月	学校訪問	与論高校を訪問
21	10月	学校訪問	沖永良部高校を訪問
22	10月	職員研修	第5回職員研修を実施
23	11月	先進県視察	大分県視察
24	11月	先進県視察	北海道視察
25	11月	遠隔授業推進フォーラム	遠隔授業配信センターにおいて、公開授業、事例発表（配信センター・受信校協力員）、協議、講演を実施
26	11月	職員研修	第6回職員研修を実施
27	12月	学校訪問	喜界高校を訪問
28	12月	学校訪問	大島北高校を訪問
29	1月	第2回運営指導委員会	令和7年度の事業報告及び今後の方針に対する指導助言
30	1月	学校訪問	沖永良部高校を訪問
31	1月	学校訪問	屋久島高校を訪問
32	1月	学校訪問	古仁屋高校を訪問
33	1月	カタリバ合同 MTG	垣根事業各県の管理機関担当で課題や成果を共有
34	1月	職員研修	第7回職員研修を実施
35	1月	学校訪問	喜界高校を訪問
36	2月	先進県視察	長崎県視察
37	3月	第8回 PT（書面開催）	

*WG は PT の前後で適宜開催した。

2.4.1 遠隔授業推進フォーラム

(目的) 授業配信者及び協力員の資質向上。

(成果) 協力員の関与基準、表情把握の難しさ、学習意欲への働きかけなど課題を明確化した。
遠隔授業でも楽しく学べる実感や学びが得られ、共有継続の期待が示された。

1 開催概要

1	目的	今後の遠隔授業の充実を図るとともに、本県の遠隔授業に係る教職員及び参加者の資質向上を目指す。
2	日時	令和7年11月21日(金) 10:30~16:30
3	場所	鹿児島県総合教育センター第2研修棟語学研修室 教育方法研修室(ブース1)
4	参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対面参加 38人 <li style="padding-left: 20px;">(内訳) 配信者 1人 <li style="padding-left: 20px;">協力員 7人 <li style="padding-left: 20px;">構成校教諭 8人 <li style="padding-left: 20px;">構成校管理職 3人 <li style="padding-left: 20px;">構成校以外の教員 4人 <li style="padding-left: 20px;">高校教育課 10人 <li style="padding-left: 20px;">遠隔授業配信センター 5人 ・ オンライン参加 30人 <li style="padding-left: 20px;">(内訳) 県内14人(管理職5人、教諭9人) <li style="padding-left: 20px;">県外16人(行政9人、配信者3人、カタリバ4人)
5	会次第	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開会行事 10:30~10:40 ・ 公開授業 10:45~11:35 ・ 事例発表 13:00~13:50 ・ 協議 14:00~14:50 ・ 講演 15:00~16:30 ・ 閉会行事 16:30



2 公開授業

(1) 授業の概要

生徒	喜界高校3年 普通科 20人
教科書	第一学習社「高等学校 政治・経済」
単元名	「現代日本における政治・経済の諸課題の探究」(内容のまとめり A(2))
授業者	遠隔授業配信センター 海江田智充
協力員	喜界高校 臼山 祐貴子

(2) 指導案

- ・ [公民\(政治・経済\)公開授業 指導案](#)

(3) 感想・意見・質問等

感想
<ul style="list-style-type: none">・ 生徒が主体的に活動し、最小限説明→活動重視の構成が良かった。・ ゲーム式アプリ/スプレッドシート活用, チーム・ティーチングの有効性を実感した。・ RPG 教材, 動画, スプレッドシート活用で飽きさせない授業デザインが良かった。・ 配信側の工夫・声かけ・関係づくりが印象的で「自分の授業を振り返る良い機会」となった。・ 初めての参観でも「遠隔でも楽しく学べる」実態を確認, 今後の普及に期待したい。
意見・質問
<ul style="list-style-type: none">・ 可視化の難しさ: 遠隔では表情・声が見え/聞こえにくい・ ハード面: 機材・回線など学びの保障のための環境整備が前提・ 役割明確化: 授業中に協力員がどこまで助言・指示してよいかの基準が必要・ 言語・トーン: 一部の命令口調は配慮が必要 (依頼形などへの言い換え)・ カリキュラム位置づけ: 年間計画の中で今回の学びの効果・位置をどう捉えるか・ 比較検証: 専門外対面 vs 専門家遠隔の学習効果など, 検証の関心
その他
<ul style="list-style-type: none">・ 配信側・受信側で「現状/できること/すべきこと」を継続共有したい・ 制度面: 越境授業など, 所属制の柔軟化 (法制度面の改善) への期待



3 事例発表

(1) 事例発表の概要

	所属	発表者
配信	遠隔授業配信センター	加藤 寛樹
受信	大島北高校	服部 直樹
	古仁屋高校	佐伯 政雄
	喜界高校	立和名 恵
	沖永良部高校	花田 賢紀
	与論高校	石川 賢次

* 発表資料は所属校のリンクから閲覧可能

(2) 感想・意見・質問等

感想
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の授業との違いが明確になり、大変参考になった。 ・受信校の事例発表がとても有益で、配信・受信の双方の視点を得られた。 ・配信側の仕掛け・声かけ・評価の工夫が学びになった。 ・受信側の先生方の感想も参考になった。 ・環境を整えば先生・生徒双方に良い影響があると実感した。 ・遠隔授業の県全体の概要が把握でき、校内で共有したい。
意見・質問
<ul style="list-style-type: none"> ・意欲が低い生徒への働きかけを、どの場面で行うかの具体共有が不足 ・遠隔授業者の授業を継続的に観る機会が少ない（協力員も観察しづらい） ・遠隔では表情・音声の把握が難しい／機材・回線などハード整備が前提 ・授業中の協力員の関与範囲（助言・指示）の基準が不明瞭
その他
<ul style="list-style-type: none"> ・配信側・受信側で現状の継続共有を望む。 ・受信校側の事例発表の継続枠があると良い。 ・遠隔授業の先生と相談しながら進められる点が良い。



4 協議

(1) 協議の概要

協議テーマ一覧

項目	No	トピック
協議 1	(1)	本日の公開授業について
協議 2	(1)	主体的な学びを育む，受信側・配信側の協力体制について
	(2)	今，受けてみたい，授業改善に向けた研修について
	(3)	遠隔授業をうまく進めるのに，必要なこと
協議 3	(1)	「垣根を越える」とは
	(2)	理想の授業を目指して（対面・オンラインに限らず）
	(3)	10年後，20年後の高校の授業とは

(2) 感想等

【協議 1】

本日の公開授業について

感想等
<ul style="list-style-type: none"> 想像以上に質が高く，生徒との信頼関係や顔の見える授業が構築できていた。 専門性のある教員による授業や，アプリ・AI活用など，学習効果の高い内容だった。 教師が「20分黙る」時間が，生徒の主体的な活動や思考を促すのに非常に有効であった。 生徒の反応（リアクションボタン等）がリアルタイムで分かり，臨場感があった。
課題（今後の対策・検討事項）
<ul style="list-style-type: none"> タイピングが苦手な生徒への配慮や，音声・反応をより拾いやすくする工夫 安定した通信環境・設備の整備と，協力員不在時における不登校生徒等への対応策の構築 受験指導としての有効性の向上と，年間を通じた進捗確保に向けた計画立案 生徒の理解度確認や，主体的な態度の評価・見取りにおける手法の開発

【協議 2】

感想等
（主体的な学びを育む，受信側・配信側の協力体制について） <ul style="list-style-type: none"> ゲームアプリ作成など興味関心を引く教材で主体性を引き出せている。 協力員との連携により，授業が成立している。
課題（今後の対策・検討事項）
（主体的な学びを育む，受信側・配信側の協力体制について） <ul style="list-style-type: none"> 主体性やプロセスを含めた多面的な評価方法の確立 協力員との連携強化および時間割変更等への早期対応体制の構築 （今，受けてみたい，授業改善に向けた研修について） <ul style="list-style-type: none"> 教科を越えた取り組みの可視化と，課題共有の場の設定 各校の実践知（ノウハウ）を共有・蓄積する仕組み作り （遠隔授業をうまく進めるのに，必要なこと） <ul style="list-style-type: none"> 配信側の準備負担軽減と，持続可能な運営体制への転換 生徒の端末環境（機種・周辺機器）の統一や標準化への検討

【協議3】

感想等
(理想の授業を目指して) <ul style="list-style-type: none">・ 他校と繋がることで新しい学びや、専任教員による授業が可能になる。・ ロイロノートやClassroom等のツール活用で授業展開の幅が広がる。 (10年後, 20年後の高校の授業とは) <ul style="list-style-type: none">・ 複数校同時配信により, 小規模校や離島でも多様な科目が開設可能になる。・ 場所を問わず均質な教育が受けられるようになる。
課題(今後の対策・検討事項)
(理想の授業を目指して) <ul style="list-style-type: none">・ 遠隔授業における「生徒主体」の学びや「めあて」発見を促す指導法の研究。・ 活動時間の確保と基礎定着(受験対策)の両立に向けたカリキュラム調整。 (10年後, 20年後の高校の授業とは) <ul style="list-style-type: none">・ 教員数減少に伴う対応策の検討や, 遠隔授業における実技教科実施への対策。・ 新しい授業形態への変化に対応するための教員のスキルアップ支援。
その他
(理想の授業を目指して) <ul style="list-style-type: none">・ 「自走する授業」を目指し, 生徒の声を大切にする(脱線も学びとする)。・ 考査問題の工夫や, 活動場面の設定など, 授業デザインそのものの見直しが必要。 (10年後, 20年後の高校の授業とは) <ul style="list-style-type: none">・ 遠隔授業は今後必然的に拡大・発展する。・ 「座学はオンライン, 実習は対面」といったハイブリッド化や, 学校間連携が進む。・ 「関係性の質」を高める授業や, 生徒の協働を促す仕組みが必要。



2.5. 考察

(1) 中心拠点及び域内ネットワークの構築について

中心拠点の構築について「場所・設備・機器等」, 「授業配信者」, 「予算」の3つの項目に分けて成果・課題等を整理した。

項目	内容	成果・課題・明らかになった(分かった)ことなど
場所・設備・機器等	場所の決定	<p>【成果】 県総合教育センター内に遠隔授業配信センターを置いた。</p> <p>【課題】 授業配信者が所属する学校と勤務場所が異なるため、事務処理等に時間が必要である。</p> <p>【分かったこと】 教科書の選定において、すべての教科書がそろっている観点から、遠隔授業配信センターは県総合教育センター内に継続して設置することが望ましい。</p>
	配信ブース等の設置	<p>【成果】 県総合教育センター内の4部屋を一部屋は執務室として、3部屋は遠隔授業配信用として準備した。</p> <p>【課題】 一教室内に複数の配信ブースを設置しようとしたが、空調・消防法・費用の面から困難であった。元々ある施設をブースにせざるを得ない。</p>
	機器及びインターネット回線の整備	<p>【成果】 各ブースにモニタや遠隔授業配信用端末を設置した。</p> <p>【成果】 執務室や配信ブース用のインターネット回線を敷設した。</p>
	必要なアプリの選定・整備	<p>【成果】 県域アカウントにおいて全ての生徒職員が使用可能なGoogleWorkspaceを有効活用できた。</p> <p>【分かったこと】 スタイラスペンを持っていない生徒が過半数おり、端末でペンを活用するアプリを用いることができず、生徒の様子を見取ることが難しかった。</p>
授業配信者	規則の制定等	<p>【成果】 授業配信者(教諭)の勤務地を県総合教育センターにするために、教育委員会規則を制定する必要があった。</p> <p>【分かったこと】 教諭のサービス管理等のために、管理職が勤務地に常駐した方がよい。</p>
	授業	<p>【分かったこと】 授業前後の打合せの時間や、授業準備の時間が必要であるため、授業配信者一人当たりのコマ数(週あたり)は50分授業換算で12コマ程度を上限とすることが望ましい。</p>
予算	人員配置に関する予算の確保	<p>【課題】 遠隔授業配信センターに配置する教員は教職員定数に算入されない定数外配置となり、国庫負担教職員定数に基づく国からの人件費負担(補助)の対象外である。そのため、当該教員の給与・諸手当等を県単独の財源で恒常的に確保する必要があり、人員配置予算の確保が課題となっている。</p>

	<p>対面授業のための費用</p>	<p>【課題】本県は、配信する小規模校が離島に多く、学校訪問等の対面支援に必要な航空・船舶運賃、宿泊費等の旅費が事業予算に占める割合が大きく、相当部分を占めている。その結果、機器整備や研修等の他の取組に充当できる経費が限られるため、離島への対面授業（学校訪問等）に係る費用を安定的に確保することが課題となっている。</p>
--	-------------------	---

【中心拠点詳細（図参照）】

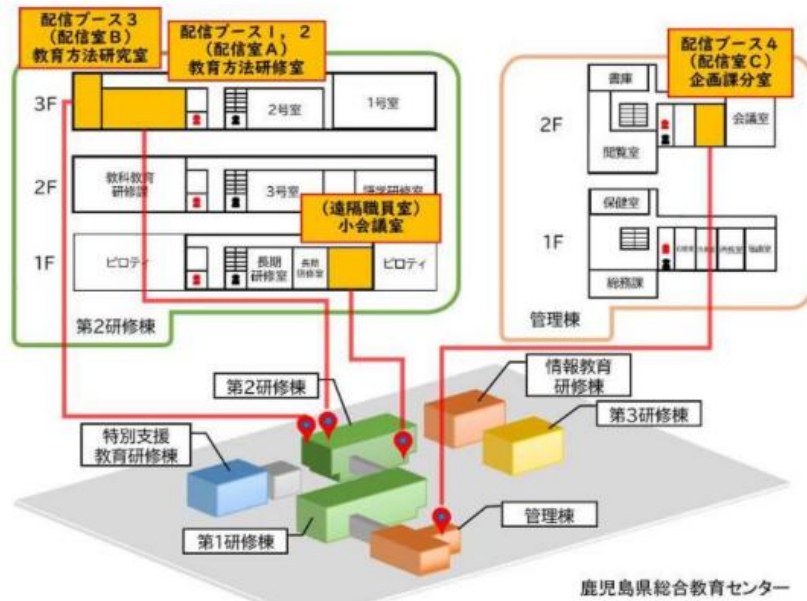
場所：鹿児島県総合教育センター内

執務室：第2研修棟1階小会議室

配信室：A（第2研修棟3階教育方法研修室）

B（第2研修棟3階教育方法研究室）

C（管理棟2階企画課分室）



【ブース1】



【ブース2】



【ブース3】



【ブース4】

図 中心拠点詳細

域内ネットワークの構築について「場所・設備・機器等」，「協力員」，「予算」の3つの項目に分けて課題・成果等を整理した。

項目	内容	成果・課題・明らかになった（分かった）ことなど
場所・設備・機器等	遠隔授業用教室の整備	<p>【成果】令和7年度に配信を行う学校は校内にすべて遠隔授業用教室を設置した。</p> <p>【成果】機器の移動をなくし，トラブルのリスクの少ない環境で配信することができた。</p> <p>【課題】遠隔授業用教室は特別教室を割り当てたが，空調がなく生徒が授業に集中できないケースがあったため，受信教室を柔軟に変更するなどして対応した。</p>
	機器及びインターネット回線の整備	<p>【成果】1人1台端末と校内の資源を最大限に活用した。</p> <p>【成果】インターネット回線の不具合等については，高校教育課と連携し，問題箇所の発見から対応までスムーズに行うことができた。</p> <p>【分かったこと】生徒使用端末のOSが統一されていないので，アプリケーションのインストールを全員に行うのに時間がかかりかかる。</p> <p>【分かったこと】マイク付きイヤホンを持っていない生徒が9割程度いた。</p> <p>【分かったこと】配信が離島の小規模校であるため，台風による停電等で一週間程度配信ができない場合があった。</p>
協力員 (受信側の教室に配置される職員)	協力員の配置	<p>【課題】小規模校は教員数が限られており，受信希望の教科数が多い場合は，全ての教科の協力員を決めるのに苦労することが多い。</p>
予算	会議等の対面実施	<p>【課題】構成校の立地範囲が広く，会議や研修などの実施に交通費が多くかかるため，会議等はオンラインで行わざるを得ない。</p>

(2) 中心拠点及び域内ネットワークの円滑な運営について

円滑な業務運営において，以下の会議等を実施する必要がある。

会議名等	主な関係機関	役割
日々の連絡	中心拠点，構成校	日々の配信の円滑な実施のための連絡
校長会	管理機関，構成校	募集や実施に関する連絡・調整など
遠隔授業打合せ	管理機関，中心拠点	授業の配信に係る連絡・調整など
運営指導委員会	管理機関	業務運営のPDCAサイクルのチェック
PT及びWG	管理機関と関連組織	関係する課や各組織の合意形成

円滑な業務運営に必要な手引等（日々の連絡等をスムーズに行うために作成）

- ・各学校の教員に配布する遠隔授業等の[令和7年度「受信校の手引」](#)（令和8年度用は改訂予定）

(3) 巡回型協力員について

受信側体制の検証方法として、巡回型協力員の配置を行った。小規模校は教職員数が少なく、配信する教科・科目数によっては受信教室に教員や職員を配置できない場合があるため、以下の条件が揃う場合は、巡回型協力員を配置できるものとした。

(巡回型の条件)

- ・ 受講する生徒の人数は 10 人程度以下とする。
- ・ 教室全体が映るカメラをオンにして、教室の状況がわかるようにする。
- ・ 一人一台端末の全生徒のカメラをオンにして・学習状況がわかるようにする。
- ・ 受信教室は、できるだけ職員室の近くに設置するなどの工夫をする。
- ・ 受信校の職員は、授業開始時と終了前は、教室で生徒の学習支援を行う。
- ・ 教室の巡回の時間や回数などの詳細は、配信側と受信側で予め授業前に確認する。
- ・ 授業中は、受信校の複数の職員で、オンライン上で授業の様子を確認する。
- ・ 生徒の状況に応じて、必要な場合は教室で生徒の支援を行う。

また、巡回型の場合の緊急時の対応として、緊急時は生徒の連絡係がすぐに職員室の職員を呼びに行くように指示しておくこととした。

(巡回型のメリット)

複数の遠隔授業を同時に配信する場合、少ない人数の協力員で遠隔授業を実施することができる。

- 〈例〉 3年 英語（6単位），数学（5単位），物理（4単位）※数学と物理は同時不可
 2年 物理基礎（2単位），英語（6単位）※物理基礎と英語は同時不可
 1年 情報（2単位）

以上 25 単位分の遠隔授業を実施する場合

学年	協力員人数	実施科目										
3年	15	英語					物理					
		数学										
2年	8	物基					英語					
1年	2	情報										

通常実施	合計	25	4	4	2	2	2	1	2	2	2	2	1	1
巡回型	合計	21	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	1	1

- ・ 通常実施の場合
 4科目を同時に配信するとき、各クラスに1人ずつ合計4人の協力員を配置する必要がある。週の合計で延べ25人の協力員の配置が必要。
- ・ 巡回型の場合
 4科目を同時に配信するとき、教室巡回の協力員1人とオンライン支援の協力員1人の2人を配置する。週の合計で延べ21人の協力員の配置が必要。

(巡回型の検証結果)

配信科目数の多い古仁屋高校で巡回型の検証を行った。検証において、特に支障なく遠隔授業の配受信を行うことができた。特に教職員数の少ない小規模校においては、巡回型の協力員配置は有効であると考えられる。

(4) 教科・科目充実型の遠隔授業における効果的な指導と評価の在り方

効果的な指導と評価の在り方について、以下の項目に分けて成果・課題等を整理した。

ア 遠隔授業の在り方

令和6年度

成果
1人1台端末を生かした授業デザインの検討を行い、受講する全ての生徒がZoomに接続し、マイク付きイヤホンをつけた状態で授業に参加する形態を試した。
課題
<ul style="list-style-type: none"> 授業が授業配信者の講義になる傾向にあり、生徒が主体的・協働的に学習したりする時間を確保できていなかった（R7年度は、「授業配信者が話していない時間を20分以上確保する」をテーマに、遠隔授業において生徒が主体的・協働的に学習する時間を設ける）。 生徒の意見の中に「普段の授業に比べて、遠隔授業では質問をしにくい。」というものがあつた（R7年度はZoomのチャット機能の他に、GoogleClassroomやGoogleFormsを用意するなど複数の窓口を設けた）。

令和7年度

成果
<ul style="list-style-type: none"> 外部講師による研修を7回実施（下記参照）し、配信者のスキルを向上させることができた。 相互に授業で効果的であったことや挑戦したことについて、具体的な内容を情報共有する研修として「配信者相互研修（ミセルバ30）」を実施した。 授業に関する取組を、主体的な学び、個別最適な学び、協働的な学び、振り返りの四つの項目に整理し、教師用ルーブリック（下記参照）を作成・活用した。 教師が「20分黙る」という目標を設定して授業を実践したことで、生徒の学習活動時間が確保され、生徒が、自ら考え、選択する場面が増え、学びの質が向上した。
課題
作成したルーブリックの4つの項目のうち、協働的な学びについては、さらなる充実が求められるためアプリの活用等を通して改善を図る必要がある。

職員研修の詳細

第1回「これからの遠隔教育の在り方について」	木田 博 氏
第2回「オンラインにおける指導の在り方」	平田 祐太朗 氏
第3回「未来の授業 (!?) 体験ワークショップ」	福田 竹志 氏
第4回「高校教育の将来ビジョン」	東原 義訓 氏
第5回「効果的な遠隔授業の手引」	起塚 拓志 氏 平田 紅梨子 氏
第6回「Canva や生成 AI の授業等での活用方法について」	坂本 良晶 氏
第7回「Padlet 勉強会～あしたから、これでできるよ, padlet～」	平田 紅梨子 氏

教師用ルーブリック

	主体的な学び Autonomy	個別最適な学び Personalization	協働的な学び Collaboration	振り返り Reflection
S	AIを活用し、自分で目標・時間配分を最適化した学習を行っている。	AI等を主体的に使いこなして、複雑で高度な課題を達成している。	Digitalを駆使し様々な人や考えに触れ、新たな価値を共創している。	学習計画とその効果をデータ分析し、常に学習をupdateしている。
A	目標・学習方法・時間配分等を自分で決めて学習している。	必要な支援等を自発的に活用して、課題を達成している。	自ら積極的に情報や考えを交換し、視野を広げながら学習している。	学習計画や過程・成果を自らメタ的に振り返り、改善している。
B	先生の指示に従い、学習方法や時間配分等を自分で一部決めて学習している。	先生の指示に従い、自らに必要な支援を選択して、課題を達成している。	先生の指示に従い、自分と多くの友達を考えを参照・確認しながら学習している。	先生の指示に従い、学習計画や過程、成果をメタ的に一部振り返っている。
C	学習方法・時間配分等を自分自身で決めていない。	学習で困っても何もできず、課題が達成できないことがある。	普段は、周りの生徒以外と考えなどを共有する機会はない。	普段は自分で学習を計画したり、学習過程を振り返ることはない。

東原(2025)「GIGAスクール時代に相応しい授業へ」(研修資料)を元に作成

イ 授業終了後のアンケート

令和6年度

成果
自らの学習を自己調整することを期待し、全ての授業で、生徒には次の授業までの学習目標を書かせるアンケートを作成した。
課題
受講者が回答内容を後日参照できないため、振り返りがその場限りとなっている。学びのプロセスが蓄積されず、次の授業での実践や改善に結びついていない点が課題である。

令和7年度

成果
<ul style="list-style-type: none">・自分が記入したアンケート内容を後から確認できるよう改善を図った。これにより、生徒は「書いて終わり」ではなく、自分の学びや考えを振り返ることができるようになり、振り返りの質が高まった。・個人が特定されない形で他の生徒の振り返りも参照できるようにし、他者の考えや気づきに触れながら振り返りができるようになった。・アンケート内容を協力員と共有することで、生徒の理解度や学習の変化を正確に把握することが可能となった。これにより、個々の状況に応じた適切な学習支援を展開できる体制が整った。

ウ スキル向上のための先進県視察

令和6年度

成果
<ul style="list-style-type: none">・長崎県、高知県、岩手県の視察を行い、1人1台端末の活用方法や、巡回型協力員の在り方等について知見を得た。・各県の遠隔授業に係る行政担当者との合同ミーティングに参加し、各県の担当者との繋がりを築き、情報交換を行いやすくした。

令和7年度

成果
新潟、島根、北海道、大分の視察を行い、授業でのアプリケーションの効果的な使用、芸術を実施する際の機材、留意事項等を整理することができた。

エ オンラインでの筆記テストの実施方法

令和6年度

成果
<ul style="list-style-type: none">・採点ソフト「百問繚乱」を用いた評価までの流れを確認した。・生徒答案データの取り扱いについて、メールで送信しないなどの整理を行い、セキュリティ上問題が発生しにくい流れを作った。
課題
答案をデータ化する際に使用するスキャナ環境が構成校ごとに異なり、データ化の手順が学校ごとに異なる。

令和7年度

成果
<ul style="list-style-type: none">・採点ソフト「百問繚乱」の活用により、採点から評価に至る一連の業務を滞りなく、かつ効率的に実施できた。・受信校とのデータのやり取りはマニュアルを作成した。これによりトラブルなく円滑に実施できた。

3. 通信教育の実施やその運営体制に関する取組

3.1. 調査計画

年月	実施内容
R 8年 5月	学習デザインの検討
7月	学習コンテンツの構築 教科「情報」「数学」通信教育開始 運営指導委員会の実施
9月	学習状況の確認 アンケートの実施
12月	教科「英語」通信教育開始
R 8年 1月	運営指導委員会の実施

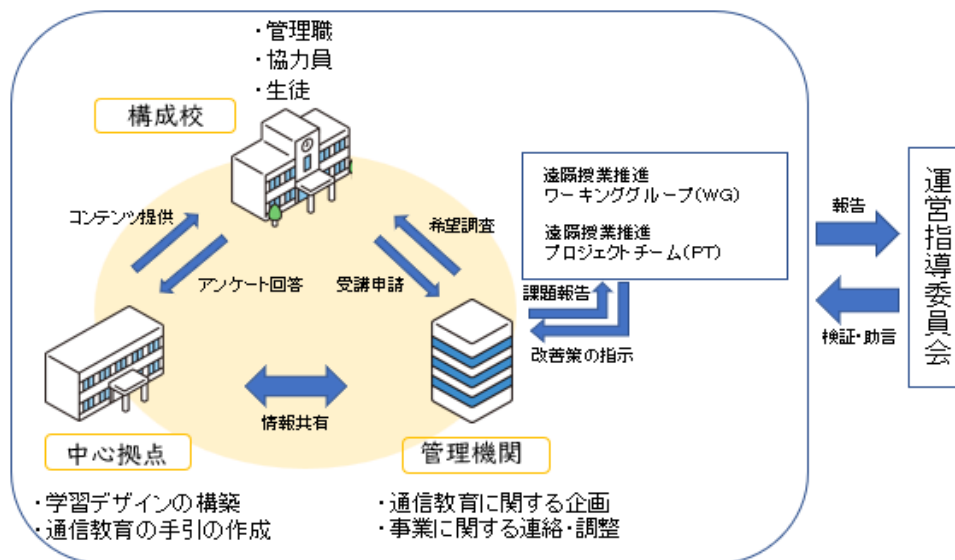
3.2. 実施体制

【通信教育に取り組む体制の概要】本県では、令和7年度以降、以下の体制とする。

機 関	名 称	役 割
管理機関	教育庁高校教育課	通信教育全般に係る企画、予算と決算等
中心拠点	遠隔授業配信センター	学習デザインの構築、学習コンテンツの選定、手引の作成
構成校	離島の小規模高校	生徒のニーズ調査

【円滑な調整に資する業務運営方法】業務運営において、以下の会議等を実施し業務を運営する。

会議名等	主な関係機関	役 割
日々の連絡	中心拠点、構成校	通信教育の円滑な実施のための連絡
通信教育打合せ	管理機関、中心拠点	通信教育に係る連絡・調整など
運営指導委員会	管理機関	業務運営のPDCAサイクルのチェックを行う。



3.3. 取組概要

年月	実施内容
7月	教科「情報」「数学」の通信教育実施
8月	教科「情報」「数学」の通信教育実施
9月	教科「情報」「数学」の学習状況のまとめ
R 8年 1月	運営指導委員会の実施 教科「外国語」の通信教育実施
2月	教科「外国語」の通信教育実施
3月	教科「外国語」の通信教育実施

3.3.1. 通信教育実施表

中心拠点 (※1)	受信校	教科名	科目	教育課程 (※2)	開設 年度	開設学 年	通信教育実施 理由
県総合教育センター	与論高校	情報	情報 I	夏期課外授業	R 6	3年	長期休業期間中の自宅学習支援
県総合教育センター	喜界高校	情報	情報 I	冬期課外授業 自宅学習	R 6	3年	長期休業期間中及び2学期, 3 学期の自宅学習支援
遠隔授業配信センター	喜界高校	情報	情報 I	夏期課外授業	R 7	1年	長期休業期間中の自宅学習支援
遠隔授業配信センター	古仁屋高 校	数学	数学 II	夏期課外授業	R 7	3年 2年	長期休業期間中の自宅学習支援
遠隔授業配信センター	喜界高校	外国語	英語	自宅学習	R 7	3年 2年	自宅学習支援

3.4. 取組内容

	年月	項目	内容
1	R 7年 7月	オリエンテーション 教科「情報」通信教育 教科「数学」通信教育	実施期間 7月10日(木)～8月31日(日) 実施期間 7月31日(木)～8月20日(水)
2	7月	運営指導委員会	通信教育実施計画の報告
3	R 8年 1月	運営指導委員会	通信教育実施内容の報告
4	1月	オリエンテーション 教科「外国語」通信教育	実施期間 1月22日(木)～3月25日(水)
5	2月	運営指導委員との面談	平田委員と令和7年度の実施の振り返り

3.5. 考察

(1) 通信教育における生徒の主体的な学習を促す支援の在り方

令和7年度

教科「情報」通信教育の課題及び支援の改善

項目	内容
仮説	<ul style="list-style-type: none"> ・学習開始前に「ゴールの明確化」及び「初回学習計画作成支援」を行い、自ら学習計画を立てることで、生徒は学習の意義と方法を具体的に理解し、学習への心理的ハードルが下がる。その結果として、学習に取り組み始める生徒の割合が高まる。 ・教員による定期的な声かけと、グループ内での声掛けを組み合わせることで、生徒は進捗を客観的に把握しやすくなり、学習計画の見直しや学習の継続率が向上する。
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・取り組んだ生徒は多かったが、最後まで終わらなかった生徒が多かった。
考察	<p>(課題への取組状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全ての課題に取り組んだ生徒 25% ・取り組んだが最後まで継続できなかった生徒 68.8% ・全く取り組まなかった生徒 6.3% <p>(導入前段階における取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に取り組む意欲のある生徒 64.7% ・通信教育を終了するために、グループを作ることが役に立つと思う生徒 82.4% <p>(導入段階における取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標達成に向けて取組を開始した生徒 93.8% <p>(継続段階における取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信教育に意欲的に取り組めた生徒 43.8% ・グループ内での声掛けはあった生徒 75.0% ・グループ内での声かけにより、学習計画の見直しを行った生徒 56.3% ・グループを作ることが役に立ったと感じた生徒 37.5% <p>導入に関する支援について、オリエンテーション後、該当する教科に取り組む意欲のある生徒の割合は68%であった。学習への着手率については、信頼関係が気づけた教員からの声かけにより93.8%と良い結果となった。</p> <p>継続に関する支援について、グループ内での声かけにより、学習計画の見直しを行った生徒が56.3%いたにもかかわらず、すべての課題に取り組んだ生徒は25%と、仮説の妥当性は指示されたとは言えず、学習の継続に課題を残した。</p> <p>生徒が主体的に学習する意欲が向上するような支援ができるように、職員研修などを通して、スキルアップに務めたい。</p>

教科「数学」通信教育の課題及び支援の改善

項目	内容
仮説	<ul style="list-style-type: none"> ・学習開始前に「ゴールの明確化」及び「初回学習計画作成支援」を行い、自ら学習計画を立てることで、生徒は学習の意義と方法を具体的に理解し、学習への心理的ハードルが下がる。その結果として、学習に取り組み始める生徒の割合が高まる。 ・教員による定期的な声かけと、スプレッドシートを用いた進捗状況の可視化を組み合わせることで、生徒は進捗を客観的に把握しやすくなり、学習計画の見直しや学習の継続率が向上する。
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・取り組んだ生徒は多かったが、最後まで終わらなかった生徒が多かった。
考察	<p>(課題への取組状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全ての課題に取り組んだ生徒 27.7% ・取り組んだが最後まで継続できなかった生徒 27.9%

	<ul style="list-style-type: none"> ・全く取り組まなかった生徒 44.4% (導入前段階における取組) <p>参加意欲スコア (1～5段階で5が最も良い評価として、生徒自身が評価したものの平均)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な計画を立てることができた 4.6点 ・学習を計画通り進めるための工夫ができた 4.6点 (導入段階における取組) ・目標達成に向けて取組を開始した生徒 66.6% (継続段階における取組) ・スプレッドシートを週1回以上更新した生徒 50% ・教員の声かけにより、学習計画の見直しを行った生徒 61.1% <p>参加意欲スコア (1～5段階で5が最も良い評価として、生徒自身が評価したものの平均)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画通り進めることができたか 3.5点 ・計画を見直すなど工夫することができたか 4.07点 <p>導入に関する支援について、「ゴールの明確化」及び「初回学習計画作成支援」を行った結果、アンケートにおける「自分なりの学習ゴールの設定」「具体的な計画立案」「工夫の意識」に対する評価はいずれも学習参加意欲スコアの平均が4.5点以上と高く、生徒の心理的ハードルの低減に一定の効果が見られた。一方、実際に学習を開始した生徒の割合は55.6%となり、想定していたよりも低い水準であったため、仮説の妥当性は支持されたとはいえないと考える。</p> <p>継続に関する支援について、教員による定期的な声かけとスプレッドシートでの進捗可視化を組み合わせた結果、週1回以上シートを更新した生徒は50%、教員の声かけによって計画を修正した生徒は61.1%と高く、一定の自律的な見直し行動が見られた。一方、最終課題まで到達した生徒は27.7%に留まり、継続支援の成果には個人差が残った。学習習慣や学習環境に応じた個別支援のさらなる工夫が今後の課題である。</p>
--	---

教科「外国語」通信教育の課題及び支援の改善

項目	内容						
仮説	<ul style="list-style-type: none"> ・学習開始前に「ゴールの明確化」及び「初回学習計画作成支援」を行い、自ら学習計画を立てることで、生徒は学習の意義と方法を具体的に理解し、学習への心理的ハードルが下がる。その結果として、学習に取り組む始める生徒の割合が高まる。 ・オンラインでの英文の説明やペアでの相互鑑賞を行うことで、学習意欲と継続率が向上する。 						
結果	<p>課題への取組状況</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 80%;"></th> <th>人数 (割合)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>課題に取り組んだ生徒</td> <td>5人 (100%)</td> </tr> <tr> <td>計画通り実施した生徒※</td> <td>5人 (100%)</td> </tr> </tbody> </table> <p>※5人中3人は継続中 (8回中5回まで計画通り実施)</p>		人数 (割合)	課題に取り組んだ生徒	5人 (100%)	計画通り実施した生徒※	5人 (100%)
	人数 (割合)						
課題に取り組んだ生徒	5人 (100%)						
計画通り実施した生徒※	5人 (100%)						
考察	友人同士で英作文を読み合うことが効果的だと感じられた。また、AIの効果的な活用を行った生徒もいた。教師の声かけも十分に機能していた。						

4. まとめ

(1) 中心拠点及び域内ネットワークの構築について

主な成果と目的の達成状況

<p>(主な成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠隔授業配信センターから単位認定が可能な教科・科目充実型の遠隔授業を配信した。 ・管理機関（県教育委員会高校教育課）と中心拠点（遠隔授業配信センター）の連携の在り方を整理し、随時連絡を取りながら事業運営を行った。 <p>(目的の達成状況)</p> <p>令和8年度は、新たな科目開講はないものの、令和7年度よりも多くの授業を配信する予定である。離島の小規模校において、遠隔授業が定着し、生徒の多様な進路実現に資する事業となるように今後も引き続き連携を深めて取り組んでいく。</p>
--

明らかになった主な課題と対応

主な課題	対応
<ul style="list-style-type: none"> ・受信校の学校行事等により不規則な校時になることが多く、その把握・調整が必要になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受信校からは日報を送付してもらい、急な変更等も把握できる体制を構築した。 ・Google カレンダーを用いて遠隔授業配信センター内で情報を共有し、時間割変更等に対応の漏れがないようにした。 ・同じブースで異なる学校が時間割に連続して入ると短縮授業等への対応が難しく、時間割とブース配置を調整した。
<ul style="list-style-type: none"> ・管理機関（県教育委員会高校教育課）と中心拠点（遠隔授業配信センター）の連携の在り方を整理する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔授業に関する公文発出に関しては、遠隔授業配信センターが原案作成に協力し、高校教育課が発出した。 ・対面授業や県外視察等の出張に関しては、遠隔授業配信センターが日程調整等を行った上で高校教育課に連絡し、その後、高校教育課が公文を発出した。

運営指導委員会で挙げられた意見

<ul style="list-style-type: none"> ・中心拠点（配信センター）の役割強化と投資について 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔・テクノロジーは今後の「当たり前」になるため、人・モノ・金を継続的に投資し、将来的な規模拡大（例：10年後の拡大）も見据えて体制整備を進めるべき。
<ul style="list-style-type: none"> ・配信者の専門性の可視化・継承について 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔授業は特殊スキルであり、新任者が戸惑う期間を減らすため、配信スキルを整理し、ループリック等で示してノウハウを全体共有・継承する。
<ul style="list-style-type: none"> ・成果の共有基盤づくりについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・高評価・成果の蓄積が制度改善にもつながるため、情報発信を継続し、成果や教材・実践を一覧できるポータルサイト整備など、域内で共有できる仕組みを整える。
<ul style="list-style-type: none"> ・必要性の明確化について 	<ul style="list-style-type: none"> ・離島・小規模校で履修困難な教科を遠隔で補い、地理的条件を学びの不利にしないという目的を明確にし、域内連携を後押しする。

(2) 中心拠点及び域内ネットワークの円滑な運営について
 主な成果と目的の達成状況

<p>(主な成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・巡回型協力員の配置について検証を行い、特に支障なく遠隔授業の配信を行うことができることを確認した。 ・年度途中で生じたインターネット回線の不具合については、管理機関と連携して対応を行った。 ・各学校の教員に配布する遠隔授業等の令和7年度「受信校の手引」を改訂する。 ・各学校の生徒に配布する令和7年度遠隔授業「生徒学習の手引」を改訂する。 <p>(目的の達成状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通して、遠隔授業を円滑に配信することができた。 ・対面授業時等に受信校の管理職、協力員と面談等を行い、お互いに情報交換することで、より円滑な連携体制を整えることができた。

明らかになった主な課題と対応

主な課題	対応
・遠隔授業用教室に空調がなく、夏場は授業を実施することが難しい。	・受信教室を柔軟に変更するなどして対応した。
・授業時間以外の生徒、協力員とのつながりがなく、人間関係を構築することが難しい。	・対面授業時の面談等を通して関係の構築に努めた。
・配信者の出張や体調不良等で配信できない場合がある。	・事前に分かっている場合は、オンデマンド教材を各配信者が作成することで対応した。

運営指導委員会で挙げられた意見

・新任配信者への立ち上げ支援について	・異動直後の戸惑いを最小化するため、経験者の気づき・変化を指針として示し、体系化する。
・巡回型の位置づけと継続性の整理について	・少ない人数で複数の教室を支える「巡回型」などの効率的な例を、単なる特例で終わらせるのではなく、全国の地方高校が選べる「新しい学びの選択肢（オプション）」として広めていく必要がある。

(3) 教科・科目充実型の遠隔授業における効果的な指導と評価の在り方

主な成果と目的の達成状況

<p>(主な成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1人1台端末を生かした授業デザインの検討を行い、受講する全ての生徒がZoomに接続し、マイク付きイヤホンをつけた状態で授業に参加する形態を試した。 ・ 授業の最後に実施するアンケート内容の改善を行い、生徒の振り返りの質が向上した。 ・ 職員研修を計画的に実施し、配信者のスキル向上を図ることができた。 ・ 成績について、学期ごとに配信センター全員で確認するとともに、個票を配布するなどの取組を行った結果、生徒が評価を次の学習に活かすことができた。 ・ 支援を必要とする生徒に対し、放課後Zoomを使用し個別指導を行ったり、対面授業の際に個人面談を行い、学習状況を確認し、アドバイスをを行った。 <p>(目的の達成状況)</p> <p>1人1台端末を活用した授業デザインにおいて、対面授業では対応が難しかった個別最適化に向けて、各種ツールを効果的に活用しながらデザインの更新を図りたい。</p>
--

明らかになった主な課題と対応

主な課題	対応
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の中で、生徒が主体的に学習に取り組む時間は確保することができたが、協働的な学びについて、さらなる充実が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 令和8年度は、スプレッドシート、Padletを利用し、協働的な学習の充実を図る。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業後に出口アンケートを実施しているものの、生徒の振り返りがその場限りとなり、記入内容を次の学習や授業改善に十分に活かしかけていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が前回や他の生徒の振り返り内容を確認できるようにし、協力員とも共有したことで、生徒の学習状況に応じた支援が可能となり、生徒が学習の変化を意識して振り返り、次の学習に生かそうとする姿が見られるようになった。

運営指導委員会で挙げられた意見

<ul style="list-style-type: none"> ・ ルーブリックの提示と達成度の可視化について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒にルーブリックを事前に示し、目標を達成できたかを本人も教員も判断できるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 上位段階（S段階等）の設定について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主体的に伸びる生徒が出てくるよう、A基準の上に更に上位段階（S段階など）を設け、挑戦目標を明確にする。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 出口評価（振り返り・アンケート）の質向上について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 姿勢面だけでなく、学習内容の理解や「学び方・方略」まで問う項目を入れ、授業改善につなげる。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習者中心の授業設計について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知識伝達型に偏らず、学習者同士の意見交換・発表などを取り入れ、配信者はファシリテーターとして学びを支える。

(4) 通信教育における生徒の主体的な学習を促す支援の在り方

主な成果と目的の達成状況

<p>(主な成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループを作り，進捗状況の共有を行うことで，生徒が自律的な学習計画の見直しをすることができた。 ・スプレッドシートでの進捗状況の可視化を行うことで，生徒が自律的な学習計画の見直しをすることができた。 <p>(目的の達成状況)</p> <p>学習デザインを更新することで自律的な学習計画の見直しができた。</p>

明らかになった主な課題と対応

主な課題	対応
<ul style="list-style-type: none"> ・全ての課題に取り組んだ生徒の割合が想定よりも低い水準であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に学習する意欲が向上するような支援ができるように，職員研修などを通して，配信側のスキルアップを図る。 ・学習習慣や学習環境に応じた個別支援の更なる工夫を行う。

運営指導委員会で挙げられた意見

<ul style="list-style-type: none"> ・学習を「始められる」環境づくりについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・いかに勉強を始めようと思える状況を作るか，メカニズムを意識して仕掛けを設計する。
<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜやるのか」の納得について 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの学習者は目的や意味づけに納得できないと動けないため，学習の意義を言語化して支える。
<ul style="list-style-type: none"> ・主体性を0/1で捉えないことについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に取り組む生徒を「やる／やらない」の二分法で評価せず，段階的に支援を検討する。
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアラーニングや発表の導入について 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者同士の説明・発表など“スクーリング的”要素を入れ，緊張感のある状況を作ることで継続を促す。
<ul style="list-style-type: none"> ・目指す姿の明確化について 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終的にどうしていきたいか（学習習慣の定着など）を明確にし，効果的な仕掛けを共有していく。